二〇二三年五月二六日

帰宅して窓開け放つ夕薄暑　かえる
花火めく星を散らして四葩咲く　む　べ
一灯も無き箱庭に星明かり　宏　虎

二〇二三年五月二五日

訴ふるごとくに鳴ける蟇　千　鶴
まくなぎを払ひ孤独に耐へにけり　たか子
厨窓守宮の足の踏ん張りて　明日香

二〇二三年五月二四日

欄干に身を迫り出して蛍狩り　豊　実
序破急の風に従ふ茅花かな　たか子
薔薇園のベンチに並ぶ豆画伯　智恵子

二〇二三年五月二三日

切り花や侍者のごとくに霞草　ぽんこ
八ツ橋や池を埋めし杜若　満　天
雨音の間遠となり皐月闇　澄　子

二〇二三年五月二二日

地下足袋のまま濡れ縁に三尺寝　みきお
濃紫陽花ひと雨ごとに色深め　満　天
思ひ出を語りあふ夜や青葉木菟　あひる
篝火の波にもつるる鵜飼かな　素　秀

二〇二三年五月二一日

故郷の兄と見ている蛍かな　あひる
毎朝の手に一盛りの苺摘む　豊　実
山映し明日の田植をまつ水田　よし子
麦秋や真白な雲の動かざる　なつき

二〇二三年五月二〇日

袋角何度も辞儀し鹿せんべい　素　秀
商談を切り出す前の麦茶かな　豊　実